慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 岡原正幸著『感情資本主義に生まれて』慶應義塾大学出版会、2013年
Sub Title	
Author	小田切, 祐詞(Odagiri, Yuji)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.98- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : 岡原正幸著『感情資本主義に生まれて』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：岡原正幸著
『感情資本主義に生まれて』慶應義塾大学出版会、2013 年

小田切　祐詞

本書は、1998 年に出版された『ホモ・アフェクトス』に続く、岡原氏の二冊目の単著である。前著で提示された方向性が一般読者にも親しみやすい形で描かれている本書は、「ホモ・アフェクトス的転回」以後の岡原社会学を知るための格好の入門書となっている。

もちろん、前著との連続性が維持されているからといって、本書は単なるその焼き回しではない。現代社会を「感情管理」から特徴づける前著の視座が洗練されると同時に、資本主義との相関性が明確化されることによって、現代社会論の更新が図られている。また、そこで提示される処方箋にも、前著からの一定の前進が見られる。

「感情資本主義」という語に結実する現代社会論と、それに対する実践的提言という二つの側面から成る本書の概要を、以下記していきたい。

岡原氏によれば、我々は、絶えず自分の感情を意識化し、管理することが強く要求される社会に生きている。この場合の「感情管理」とは、「感情規則」、すなわち、「生理的な変化が起こされる状況や出来事と、そこで経験されるべき感情をセットにするような、社会的に共有されたガイドライン」（33 頁）に応じて、「自分の内的な状態を作り込む／作りかえる作業」（33 頁）を意味する。

岡原氏は、感情管理の歴史的成立の背景を、文明化に求めている。中世初期、17 世紀宮廷社会、近代市民社会と時代が下るにつれて、衝動や情動の抑制が増大し、羞恥や不快感の閾値が低下したと主張される N・エリアスの文明化論。そこから岡原氏がとりわけ引き継ぐのは、統制審級の内在化という視点である。それは、統制の外的強制から自己統御への変質を意味し、これによって人びとは、内面化された感情規則に従って、自動的に感情管理を行なうようになったとされる。

だが、エリアスの文明化論の補正あるいは拡張を行なった C・ヴァウタースのインフォーマル化論が示すのは、自己統御と感情管理の次のような現代的変質である。すなわち、現代の自己統御の様態は、エリアスの文明化論から導き出されるものよりもずっと意識的で反省的なものへと変容しており、それに応じて感情管理もまた、より一層意識的に遂行されるようになっている。

感情管理のこのような質的変化に応じて、岡原氏は「感情労働」、すなわち、「人と関わる仕事で、顧客の心理的欲求や満足に焦点を合わせ、そのために、労働者自身が感情管理をある程度継続的に行なうような仕事」（34 頁）を、二つに類型化している。一つは、エリアス的な文明化論から導き出される感情管理をメインとするような感情労働であり、このときの労働者に

小田切祐詞「書評：岡原正幸著『感情資本主義に生まれて』」
『三田社会学』第 19 号（2014 年 7 月）98-101 頁

特徴的な心理的状態は、A・R・ホックシールドの議論に見られるような疎外感である。「暗い感情労働」と形容されるこの種の感情労働に対置されるのが、充実感を伴って行なわれる「明るい感情労働」であり、ここでは感情管理の規準となる感情規則さえもが反省的に吟味される。

一見すると、インフォーマル化の段階に入って、人びとは、感情を自由にかつ主体的に管理する可能性を手にしたかに見える。だが、岡原氏はこの事態を楽観的に捉えているわけではない。

というのも、一方で、S・G・メストロヴィッチの「ポストエモーション社会」や「二つのマック化」といった概念が示すように、個人が自由で自主的に表出しているように見える感情も、想定された範囲内に収まるありきたりなそれでしかなく、そこで経験されるのは、モーションとつながらないエモーション、つまり行為として具体化されることのない「ポストエモーション」だからである。テーマパークで提供される計算通りの「感動」や、悲惨な情景を映し出す報道番組によって喚起される、社会への働きかけを伴わない、ただ消費されるだけの「憐れみ」を、その具体例として考えることができる。

他方で、自己啓発やセラピーカルチャーの分析を通して見えてくるのは、自由で自主的に見える感情管理が、実は、あるべき自己の実現を達成するよう煽られる形で行なわれている可能性である。しかも、自己実現の目標とされる「自分らしさ」は、自分の中に「すでにある」ものと見なされる傾向がある。つまり、それは、他者との関係から紡ぎ出されるものでもなければ、自分で新たに選ばれるものでもない。自己実現とは、つまるところ、他者を排した、「すでにある自分を確認する試み」（72 頁）でしかなく、その失敗もすべて自分が引き受けなければならない。

さらに、「感情資本」が説明変数として加えられることによって、感情管理社会における社会的不平等と疎外の様態が明らかにされる。

感情資本とは、「文化資本のひとつである身体化された資本として、感情管理の特定のスタイルを『自然に』身につけた人間が、より有利な社会的位置を『個人的に』獲得するかにみえるような事態を招くもの」（77 頁）と定義される。階層性が強く刻印されているこの資本は、階層の再生産に寄与する働きをもつとされる。

問題は、いかなる様式の感情管理が、上述のように特徴づけられる感情管理社会において、資本として作動するかである。岡原氏によればそれは、規定の感情規則の同調だけにとどまらず、その都度の状況に応じてフレキシブルに感情規則を主題化することができる、「いわばインフォーマル化した段階の感情管理能力」（83 頁）である。このような能力を相続し、みずからの感情を積極的に投資する「自己実現的な企業家マインド」（84 頁）をもつ「感情アントレプレナー」こそが、「ブルジョワ感情労働者」の現代的形象なのであり、彼らは「明るい感情労働」につきやすい傾向がある。反対に、感情資本になりにくい感情管理の様式しか身につけていない「プロレタリア感情労働者」には、他律的な感情規則を強いる「暗い感情労働」が割り当てられることになる。

ただし、どちらのタイプの感情労働者にせよ、彼らが経験するのは、ありきたりのポストエモーションでしかない。このことは、自分の感情を感情そのものとして経験する契機を彼らから奪うことにつながる。それゆえ、たとえブルジョワ感情労働者であっても、「感情的に感受されてきた身体の確実さや生の確実性」（87 頁）を失わせる、「感情疎外」の危険からは逃れられないのである。

このような事態を打開するための方策として、岡原氏は、「感情公共性」と「パフォーマティブ社会学」を提示している。

感情公共性とは、前著でも提示された一つの社会構想論とでも言うべきものであり、それが意味するのは、「単なる感情の吐露でもなく、単なる合理的な討議でもなく、生の全体性をすくいあげ、かつその都度みせられるメンバーの苦難を克服する社会空間」（93 頁）である。それは、自分の感情を語る「当事者」と、それに耳を傾ける「当事者」が、出会い、まよい、にもかかわらず共にいるような場であり、そこで達成される感情の変更は、「外的な拘束であったり、マインドコントロールではなく、生きられたものとしてありうる」（94 頁）。岡原氏は、感情公共性を通じて構築されるこの種の感情に、「感情管理社会への風穴」（98 頁）となる可能性を見出している。

パフォーマティブ社会学の構想は、前著の「パンク社会学」に続く、感情社会学、ひいては社会学全般の再編の試みである。それは二つの視座から構成される。一つ目は、現実のパフォーマティブな特性、すなわち、学問もその一つである現実が、その場の相互行為の中で構築されるという点を強調することで、学問的営為も一つのパフォーマンスと理解する視座。もう一つは、オーディエンスの関心や行動を活性化できるよう、演劇やアートといったパフォーマンスを積極的に活用しようとする視座である。そこで企図されているのは、「学問的な空間自体が感情公共性になりえる可能性」（106 頁）の創出である。

以上のように要約される本書に触れて、評者は二つの感情を抱いた。

一つは閉塞感である。上述のように、本書は、「暗い感情労働」に比べればずっと自律的な感情労働を達成しているかに見えた「明るい感情労働」でさえも、感情疎外の魔の手から逃れられない点を強調していた。このことは、感情資本主義において疎外を免れた感情を経験することがどれだけ難しいか、また、資本の論理に絡めとられることのない自律的な感情管理を構想することがどれだけ難しいかを示している。本書が描くこのような現代社会像に、評者はたまらない閉塞感を覚えたのである。

だが、事態はより深刻なものとなっているかもしれない。リュック・ボルタンスキーとエヴ・シャペロとの共著『資本主義の新たな精神』によれば、テイラー主義的労働形態においては、人間存在は機械のように扱われた。それゆえ、人間存在の最も人間的な特性、たとえば感情や道徳感覚、名誉、発明能力を、利潤追求に直接奉仕させることができなかった。ところが、現行の資本主義は、より洗練された人間工学に依拠することによって、人びとの内面により深く入り込んでくる。その結果、人間をその固有の人間性において道具化することが可能になって

いるという。つまり、現代資本主義の猛威は、感情を含む人間性一般にまで及んでいるかもしれないのである。

このような悲観的な時代診断が現代資本主義にしばしばつきまとうからこそ、本書が提示した感情公共性と、そこで構築される生きられた感情という処方箋に、評者はかすかな希望を感じた。これが二つ目の感情である。だが、この希望をより確かなものにするためにも、次の点に関するもう少し具体的な説明が欲しかった。すなわち、感情資本主義への「風穴」となり、感情疎外や道具化に抗する生きられた感情とは、いかなる特徴をもつのか。

前著ですでにその必要性が主張されていた生きられた感情概念の精緻化が、岡原氏の次作でさらに展開されることを、評者は強く願っている。

（おだぎり　ゆうじ　慶應義塾大学大学院社会学研究科）